

## 湿疹性外耳疾患

昭和大学耳鼻咽喉科准教授

小林 一女

(聞き手 池田志孝)

---

湿疹性の外耳疾患にはどのような疾患があるのでしょうか。非常に難治性で、困ることがあります。疾患の種類、治療法、注意点などご教示ください。

<鹿児島県開業医>

---

**池田** 小林先生、まず最初に、湿疹性の外耳疾患としてどういうものがあるか、その原因はどのようなものか考えられるか、おうかがいしたいと思います。

**小林** 質問には湿疹性の外耳疾患と書かれていますけれども、湿疹かどうかというのはこの質問だけではわからないのですが、まず外耳の病気に関しては、痛みがあるものとないもので大きく分けられると思います。痛みがあるか、それが限局した痛みなのか、耳全体なのか、そのほか痛みがなくて、湿疹でかゆみがあるのか、少し耳だれが出るのかなどいろいろな症状が考えられます。

痛みがある疾患で一番多いのがびまん性の外耳道炎で、耳の入り口から全体が少し赤くなっていたり、場合によ

っては耳だれが出たりします。痛みが特に限局している場合は、限局性の外耳道炎、いわゆるせつ、耳せつという病気があります。

耳は、外側の部分が軟骨部外耳道で、奥の鼓膜に近いところは骨部外耳道といえます。耳あかが出る腺とか皮脂腺は軟骨部の外側の外耳道にあります。多くの外耳道炎は軟骨部の周辺から骨部にかけて炎症があります。外耳道炎に湿疹が伴ったものも多くみられます。

**池田** 治療法について質問があるのですが、びまん性、限局性といったものに対して、それぞれどのような治療が行われるのですか。

**小林** 限局性の外耳道炎は毛嚢の感染で、ブドウ球菌が多いので、明らかに膿瘍で腫れているような場合は、その部分を穿刺したり、小さく切開す

ることがあります。その後、抗菌薬が入った軟膏を塗布します。痛みが強ければ痛み止めを、またブドウ球菌が多いですから、ブドウ球菌に感受性のある抗菌薬を出すこともあります。

びまん性の外耳道炎ですと、軟骨部から骨部の外耳道全体が腫れていたり、耳だれが出ていることがあります。耳だれがあれば、菌の検査をして、それに合った抗菌薬の点耳薬とか軟膏を使うことが多いです。

**池田** 一般の湿疹がある場合はどのような治療をされるのでしょうか。

**小林** 外耳炎もそうですけれど、湿疹がある方は、かゆみがあって、耳をさわることが非常に多いです。耳かきの習慣がある方が非常に多いです。必要以上に耳かきをされています。日本人はすごく耳かきが好きな方が多く、耳かきをやめていただくことが第一です。

そのほか、時々見られるのが耳栓による湿疹（かぶれ）です。補聴器の耳栓にかぶれる、イヤホンなどの耳栓にかぶれるという方もいらっしゃいます。原因があるかどうかをよくお聞きして、耳栓にかぶれるようであれば、例えば補聴器の耳栓ですと、アクリル系の樹脂ですとかぶれやすいといわれていますので、シリコンにかえていただくとか、素材をかえることも治療の一つです。

その後に耳掃除をやめてもらいます。

治療はステロイドの入った軟膏の局所塗布をしています。

**池田** 耳の湿疹で、脂漏性湿疹がありまして、皮膚科領域ですと、けっこう抗真菌薬の外用をされているのですが、耳鼻科的にはよくやられるのでしょうか。

**小林** 先ほどお話した補聴器を常時つけていらっしゃる方、お仕事で耳栓をされる方、あと慢性中耳炎があって、鼓膜に穴があって、少し分泌物が外耳道にあるような方というのは真菌感染を起こすことがあり、外耳道真菌症と私たちは言っています。診察をして、外耳道に真菌塊が見えるような場合は抗真菌薬の軟膏とかクリームを使うことがあります。

**池田** 中耳炎があって、耳だれが続いていて、また二次感染のような状態ということですね。

**小林** そうですね。

**池田** 質問ですと、非常に難治で困ることがあるというふうにあるのですが、難治性である耳の外耳道疾患、これについてはどのような推測をされますか。

**小林** おそらく過度にご自分の耳をさわるとおもいます。湿疹の方はとてもかゆみが強くて、どうしても気になってしまっていて、さわってしまう。さわってしまうと、軟骨部外耳道に軽い感染を起こす。感染を起こして、そこに分泌物が出て、痂皮がついたりする

と、またそれが気になって、いじって取っているという方が多いです。

他に真菌と一般細菌の混合感染があるのではないかと思います。

**池田** 先ほどかゆみがあるということと、それから機械的刺激として耳かきとかをやられる。綿棒とかですね。そういう場合に、かゆみを止めるということで、いわゆる抗アレルギー剤ですか、そういうものはよく使われるのでしょうか。

**小林** どうしても局所の軟膏だけではかゆくてだめだとか、あと寝ている間に無意識にかいてしまっている方がいますので、そういう場合には抗ヒスタミン薬を出すこともありますけれども、あまり効果はないようです。

**池田** 難治性の外耳道のかゆみに関して、そのほかに使われるお薬はありますか。

**小林** かゆみに対して特別というのではないのですけれども、ブロー液という酢酸アルミニウムの液があります。難治性の緑膿菌の感染とか、MRSAの感染のときに効くといわれています。

**池田** そのブロー液というのはよく処方されるものですか。

**小林** 一般的に売っているものではなくて、病院で処方してつくらなくてはいけないので、ちょっと面倒です。一般には手には入らないと思います。

**池田** そういう意味で、耳鼻科の専門医の方しか処方できないということ

ですね。

**小林** そうですね。病院で製剤としてつくらなければいけないものです。緑膿菌とかMRSAでひどい場合は、ブロー液の使用も一つの選択肢だと思います。

**池田** 診断方法がなかなか難しいと思うのですけれども、非常に疾患も多いわけですし、それから二次感染で細菌、真菌、それプラス、それぞれの混合といいますか、オーバーラップみたいなものがあると思いますけれども、そのためには一般の開業の先生がどのくらい治療をして、どのような場合、専門の先生へのご紹介が考えられるのでしょうか。

**小林** 症状をよく詳しく聞いていただいて、機械的な刺激がないかどうか、中耳炎の既往がないかなどを確認していただきます。機械的な刺激があれば、やめていただくことが一番ですし、慢性中耳炎があって、その分泌物で難治性であれば、それは専門医の先生に診ていただいて、中耳炎の治療をしなければいけないと思います。

それから、もし可能であれば菌検査をやっていたいただいて、混合感染、真菌と一般細菌の感染があるかどうかを調べてください。そのうえで局所処置をできるだけやっていただいて、それでも耳だれが止まらない、かゆみなどの症状が取れないようであれば、専門医に紹介していただければいいと思いま

す。

耳かきを一生懸命やっけていて外耳道炎を頻回になさる方は、耳の穴がだんだん狭くなってきます。ひどいときは綿棒が入らないくらい狭くなっている方もいます。綿棒の入りが左右の耳で違うとか、片側の耳の穴が狭いなどの所見があれば、専門医へ送っていただいたほうがいいと思います。

**池田** いわゆる外耳道の皮膚のリモデリングということですね。

**小林** そうですね。

**池田** それは恐ろしい状態ですね。

**小林** そういう方が時々いらっしゃいます。

**池田** そういう方は、例えば綿棒が入らなくなると、さらに細いものとか。

**小林** そうですね。そういう方はご自分でわかっている、悪いほうの耳は綿棒が最近入らなくなってきたなど自覚されています。

**池田** それでも、かゆみが強いので。

**小林** そうですね。綿棒などで刺激をしています。

**池田** かさぶたみたいなものがあるので、やっけてしまう。

**小林** 綿棒で取ってしまうようです。

**池田** その場合は、なかなかかゆみの調節、コントロールというのは難しいですね。

**小林** すごく難しいです。私のほうが先生に教えていただきたいくらいです。抗ヒスタミン薬とかステロイドの

お薬を使ってもよくなる方が多くおられます。

**池田** かゆみに関しては、最近いろいろ研究されているのですけれども、非常に複雑で、おそらく20種類以上の分子が関係してかゆみがありますので、それぞれの病態でも違いますし、それぞれの患者さんでも違うのではないかと思います。

**小林** そうですね。

**池田** 近年では漢方薬を使ったりもしているのですけれども。

**小林** 漢方薬は何を使っていますか。

**池田** アトピー性皮膚炎では抑肝散です。これも論文にしているのですけれども。

**小林** 読ませていただきます。

**池田** マウスではものすごく効きまして、今、ヒトでレトロスペクティブにやっけて、まあいいかなということで、クロスオーバー試験を予定しています。

**小林** 湿疹でも、外耳炎でも、何のかゆみでも効くのでしょうか。

**池田** その辺はわからないのです。今はアトピー性皮膚炎だけやっけています。かゆみはすごく複雑なですね。

**小林** そうですね。

**池田** 我々が予想していたよりもかゆみ関連分子が多すぎます。従来の、例えばうつ病とかにSSRIを使っていますけれども、そういった神経伝達の物質と同じような経路もかゆみは使った

りしているのです。一つの、例えばヒスタミンというレセプターを止めるだけでは、他にいろいろな分子の関与があり過ぎてかゆみは止まらないのです。そういう意味では、従来の多機能のも

のとして、シクロスポリンとかステロイドを使ったり、漢方もいろいろな生薬の混合なので、多分多機能薬として使われるという意味です。

ありがとうございました。